

那珂川町の文化財ⅩⅩ

那珂川町の古代・中世遺跡

2010

那珂川町教育委員会

はじめに

これまで、「那珂川町の文化財ⅩⅦ～那珂川町の弥生時代遺跡～」、「那珂川町の文化財ⅩⅧ～那珂川町の古墳時代遺跡～」で各時代の遺跡を紹介してきました。今回は「那珂川町の文化財ⅩⅨ～那珂川町の古代・中世遺跡～」と題して、奈良・平安時代と鎌倉・室町時代の主要な遺跡を紹介します。奈良・平安時代の日本は当時の中国にならい、奈良(平城京)・京都(平安京)に都を築き、律令国家としてまとまっていった時代で、この時代のはじめには「古事記」や「日本書紀」といった歴史書が編纂され、これ以後は文字によって記録が残されるようになります。平安時代の終わりごろには各地で力をもった豪族や有力農民が武装して武士となり、鎌倉時代には貴族に代わって武士が本格的に政治の実権を握っていきます。室町時代になると、前半は朝廷が南北に分かれ、後半は戦国大名といわれる武将が力をもち、各地で戦がおきました。那珂川町においては「日本書紀」に記載のある裂田溝、元寇の役の際に活躍した少貳景資が居城したといわれる岩門城跡、肥前の守護千葉氏が築城した一ノ岳城跡など多くの遺跡が存在します。特に、平成14～19年度にかけて裂田溝、龍頭遺跡群、岩門城跡、大塚遺跡群などで、古代・中世の遺跡の発掘調査がおこなわれ、当時の那珂川町の姿がより明らかになりました。今回の冊子では、これらの遺跡を中心に取り上げています。この冊子を通じ、古代・中世の那珂川町を知っていただき、当時に思いを馳せていただければ幸いです。

地別当遺跡群

地別当遺跡群は上梶原の丘陵上に広がる遺跡で、奈良時代の須恵器を焼いた窯跡が2基見つかりました。見つかったのは山の急な斜面で、窯をつくった人々が風向きなどを考えて場所を選んだのでしょう。窯はいずれも天井部が崩れてなくなっていますが、トンネルのように地下をくり抜いてつくられていました。窯跡近くでは灰原とよばれる須恵器を焼く際にできた灰などを捨てた場所も見つかっていて、窯内部や灰原から出土した須恵器の坏や壺は年代を知る上で重要な資料となります。また、春日市から大野城市、そして太宰府市にかけて営まれた、九州最大の規模を誇る牛頸古窯跡群との関係が注目されています。



▲奥が出土した土器、手前が置き台

右奥の鉢は高さ約16cm。置き台は窯の中で土器を水平に置くための台として使いました。



▲窯の本体 上半分はなくなっています。壁は熱で赤くなっています。下のほうには置き台が転がり落ちています。

龍頭遺跡群

龍頭遺跡群は標高40～60mの丘陵上に営まれた、弥生時代と奈良・平安時代の複合遺跡です。奈良・平安時代の遺跡としては、3間×3間の総柱の掘立柱建物跡が1棟、深さ約4mの土壇が2基確認されました。これらは丘陵の最も高い地点で見つかり、これまでに町内で見つかった掘立柱建物跡や土壇とは異なり、規模も大きく、立地も高所が選ばれています。奈良・平安時代において、ここが重要な場所であったことを窺い知る貴重な発見となりました。



▲掘立柱建物跡 一辺は約8mです。人とくらべるといかに大きいかがわかります。

後野・山ノ神前遺跡群

後野・山ノ神前遺跡群は標高約230mの山岳部に営まれた、縄文時代と奈良時代の複合遺跡です。このうち、奈良時代の遺跡としては、大規模なお祭りのあとが二つの区域で見つかり、そこでは大きな岩を神さまに見たて、そのまわりで仏教の法具をまねた土器、塩をつくるための土器、丁寧に仕上げられた土器などをお供えし、お祭りを行っていました。発掘調査によってこのような内容が明らかになったのは、九州で初めてです。



▲出土した土器 中央の壺は高さ17cm。



▲お祭りのあと 大岩の間から大量の土器が見つかりました。

中原・ヒナタ遺跡群

中原・ヒナタ遺跡群は現在の博多南駅一帯、標高約23mの微高地に営まれた遺跡群で、縄文時代から奈良時代にかけての複合遺跡です。このうち、奈良時代の遺跡としては、掘立柱建物跡・土壇・溝・墓などが発見されました。このうち、ほぼ同じ時期に建っていたと考えられる掘立柱建物跡が28棟も見つかり、当時この場所にたくさんの建物が立ち並んでいた様子が想像できます。



▲出土した土器 右奥の杯は高さ約6cm。

◀掘立柱建物跡 柱は腐ってなくなっています。



▲木棺墓 中からお供えされた土器が見つかりました。

カクチガ浦遺跡群^{うら い せき ぐん}

カクチガ浦遺跡群は標高約60mの丘陵上に営まれた、弥生時代から近世にかけての複合遺跡です。このうち、奈良・平安時代の遺跡としては氷室^{ひむろ}が2基、木棺墓^{こくわんぼ}が2基見つかり、氷室は氷を保存する施設^{しせつ}で、解けた水^{はいしゆつ}を排出するための施設がついています。発掘調査で氷室と断定^{だんてい}できるものは少なく、非常にめずらしい発見となりました。氷は夏^{こう}に鴻臚館^{かん}や大宰府^{だざいふ}で、中国や韓国からのお客さんにふるまわれたのかも知れません。



▲出土した土器 氷室と木棺墓から見つかりました。



▲氷室跡 直径5m、深さ1.5mで、底はすり鉢状になっており、円形に並んだ柱穴が見つかりました。

別所次郎丸遺跡群^{べつ しよ じ ろう まる い せき ぐん}

別所次郎丸遺跡群は那珂川左岸の標高約33mの丘陵裾部に営まれた、奈良時代から中世にかけての複合遺跡です。このうち、奈良時代の遺跡からは九州ではめずらしい鉄鉢形をした土器^{てつぱちがた}、暗文^{あんもん}が施された土器^{ぼくしよどき}、墨書土器などが見つかりました。見つかった土器のなかでも、暗文が施された土器は平城宮など、当時の都を中心とした地域で見つかる土器にとってもよく似ていることから、畿内地方^{きないちほう}から持ち込まれたと思われます。また、墨書土器には「七」や「十」のほかに、「寺」や「塔」の文字があることから、この遺跡は一般の集落などとは違って、官衙^{かんが}か寺院^{じいん}であった可能性が考えられます。



▲出土した土器 中央の壺は高さ約14cm。



▲墨書 上が「七」、下が「十」。

裂田溝

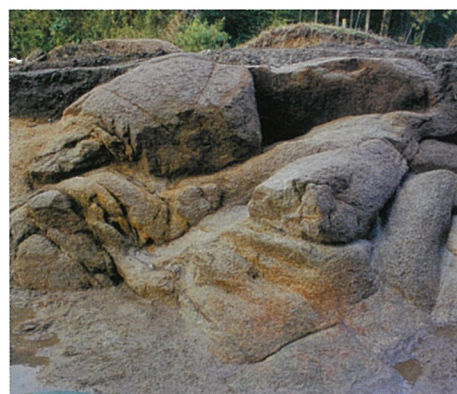
裂田溝は那珂川町山田の一の井手より取水し、安徳・五郎丸・松木を経て今光に至る総延長約5.5kmの人工用水路で、現在も利水・治水の両面において利用されています。平成14・15年度に発掘調査をおこなったところ、裂田神社の北側で「日本書紀」の『迹驚岡のところで大岩盤が行く手を阻んだ……』の記載を思い起こさせるような花崗岩の岩脈を確認しました。また、別の地点では溝に打ち込まれた木杭列を検出し、その内の1本の放射性炭素年代測定をおこなったところ、14世紀前半であることが判明しました。発掘調査で裂田溝の年代を知りうる旧溝を検出したのは初めてで、「日本書紀」と「筑前国続風土記」の約1,000年間を埋める貴重な発見となりました。平成17年度の発掘調査では、平成14年度の調査を裏付けるような花崗岩の岩脈が溝底からも検出されています。現在、岩脈の一部は保護層で覆い、見学できるよう整備しています。



▲平成14年度調査で見つかった中世の溝肩
溝際で流木がたくさん見つかりました。



▲溝岸に打ち込まれていた杭
杭の長さ45cm。



▲平成17年度調査で見つかった花崗岩の岩脈

平蔵遺跡群

平蔵遺跡群は現在的那珂川南中学校・梶原運動公園一带に広がる、標高約44mの丘陵上に営まれた、縄文時代から中世にかけての複合遺跡です。中世の遺跡としては土壌・溝・墓・掘立柱建物跡のほかに鍛冶炉が見つっています。鍛冶炉は全部で7基確認されています。炉の中あるいはその周辺からは鞴の羽口（炉の中に風を送る鞴の先に付ける）、埴塙（鉄を溶かすのに使う容器）や鉄滓などが出土し、鉄滓の化学分析から、ここで鉄の塊から混じり物を取り除き、鉄器を作る作業が行われていたことがわかりました。中世の鍛冶炉はめずらしく、貴重な資料となりました。



▲鍛冶炉から出土した遺物
左が鞴の羽口、右が鉄滓。



▲出土した土器 左奥の土釜は高さ約18cm。

岩門城跡

岩門城跡は標高約195mの城山を中心に広がる山城です。元寇の役の際に活躍した少式景資が居城したといわれ、景資と兄の経資とが争った岩門合戦の舞台ともなりました。平成14～16年度の3ヵ年かけて確認調査が実施され、調査の結果、岩門城跡は13世紀の後半から14世紀の前半頃は眺望がきく尾根の先端を利用し、15世紀代に現在の基本的な形がつくられ、その後16世紀まで使用されたことがわかりました。



▲岩門城跡 上空から撮影。



▲岩門城跡 西から撮影。



▲発掘調査の様子
土器や貨幣が出土しました。



▲出土した貨幣
左から熙寧元寶、洪武通寶、祥符□寶。



▲出土した土器
黒いものは灯明皿として使われました。



▲岩盤に掘られた多数の柱穴
城内に建物が立っていたことがわかりました。

安徳台遺跡群

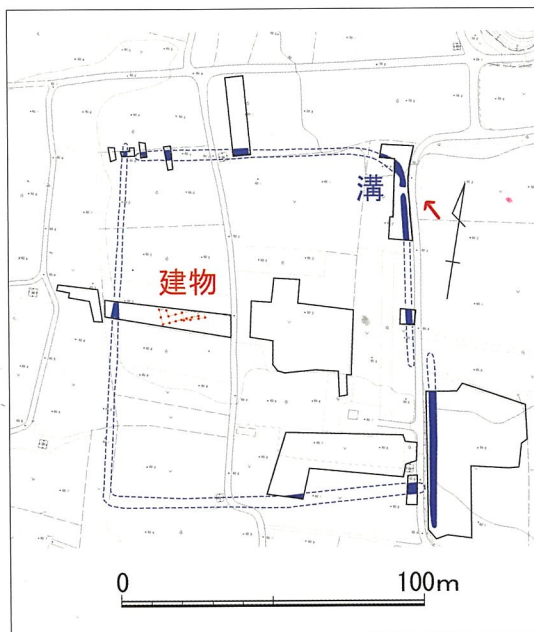
安徳台遺跡群は福岡平野の最も奥に位置し、標高約60m、広さ約10万㎡の台地上に営まれた、弥生時代から中世にかけての複合遺跡です。

台地の南西部から室町時代の居館が見つかっています。居館は一辺が約110mの方形で、周囲を溝(堀)で囲まれています。溝には、入口と見られる陸橋(りつきょう)状に切れた所が数箇所あり、一部には門の跡と考えられる柱を建てた跡も見つかっています。

居館内の調査は一部しか行っていないですが、現在3棟の掘立柱建物跡が検出されており、居館東側からは墓地も見つかっています。



▲居館を囲む溝
右図の矢印の方向から撮影。



▲居館想定図
規模は南北110m、東西100m。

大塚遺跡群

大塚遺跡群は岩門城跡から延びる標高40～60mの丘陵上に営まれています。平成19年度におこなわれた発掘調査により、室町時代を中心とした櫓跡と考えられる基壇状遺構、それを守るための堀や土塁、住居であった建物跡などが見つかりました。近くには、ほぼ同時期にこの一帯を治めていたと思われる武士の居館が見つかった安徳台遺跡群や、鍛冶炉が見つかった平蔵遺跡群があり、それらの遺跡との関係が注目されます。



▲堀と土塁

堀は深さ約2m、土塁は高さ約1.5m。



▲発掘調査後の様子

左から建物群、曲輪群、堀、土塁、主郭部と基壇状遺構。

今光・宗石遺跡群

今光・宗石遺跡群は現在の安徳公園一帯に広がる、標高約22mの河岸段丘上に営まれた、弥生時代から中世にかけての複合遺跡です。そのうち、中世の遺跡としては、大溝や火葬墓が確認され、大溝からは「原山 無量寿院」と刻まれた銅甕が出土しました。銅甕の出土は、それまで江戸時代の文献でしか知ることのできなかった中世

大宰府の寺院の存在や太宰府と那珂川町とが、何らかの関係にあったことを示す貴重な発見となりました。



▲大溝から出土した銅甕

高さは約2cm。



▲大溝から出土した銅甕

外側に文字が刻まれています。高さは約3cm。

おわりに

今回紹介した遺跡は九州最大規模を誇る牛頸古窯跡群や九州総管府の大宰府、太宰府四王寺山に所在した寺院などと生産・政治などの面で密接な関係を示すものばかりです。那珂川町にはこれら以外にも多くの古代・中世の遺跡が存在しており、町の南半の山岳部には一ノ岳城跡を初めとする中世の山城群が築かれています。さらに、神埼荘(佐賀県神埼郡)から岩門荘(那珂川町)を経て博多を結ぶ経路として、古くから人や物・交易品の往来があったといわれる肥前・筑前街道が町の中央を貫いています。このことは、古代・中世においても、この地が交通の要として、重要な役割を果たしていたことを物語っています。

1. フラコモドシ遺跡群
2. 内田遺跡群
3. 中原・ヒナタ遺跡群
4. 今光・宗石遺跡群
5. 松木遺跡群
6. 合政遺跡群
7. 後野・山ノ神前遺跡群
8. 大藪池遺跡群
9. カクチガ浦遺跡群
10. 下梶原前遺跡群
11. 大塚遺跡群
12. 平蔵遺跡群
13. 龍頭遺跡群
14. 地別当遺跡群
15. 安徳台遺跡群
16. 別所次郎丸遺跡群
17. 山田西遺跡群
18. 裂田溝
19. 岩門城跡
20. 老林城跡
21. 猫城跡
22. 鷲ヶ岳城跡
23. 一ノ岳城跡
24. 虎ヶ岳城跡

※赤文字は冊子で紹介した遺跡

那珂川町の文化財XIX 那珂川町の古代・中世遺跡 2010年

発行：那珂川町教育委員会
福岡県筑紫郡那珂川町西隈1丁目1番1号

印刷：有限会社 成光社
福岡市南区大楠1丁目29番33号

那珂川町の主な古代・中世遺跡の分布 (青印は山城)

この図は国土地理院刊行の地形図福岡・脊振山を使用しました。